

2 章 調査研究報告

1. 調査研究の目的

(1) 本事業の目的

① 座間味村の現況

座間味村は沖縄本島那覇市の西方約 40km に点在する離島区、慶良間（けらま）諸島に位置する村で、座間味（ざまみ）、阿嘉島（あか）、慶留間（げるま）の 3 つの有人島（人口はおよそ 900 人）と多くの無人島で構成されている。

豊かな珊瑚礁の内海には多様な生物群が生息することから、古くからマリンスポーツの愛好家に認知されている。冬場（1月～4月）は近海にザトウクジラの群れが繁殖を目的に多く訪れることからホエールウォッチングを冬場の観光メニューとして提供している。このように豊かな自然環境は平成 17 年にラムサール条約に登録され、県内でも屈指の観光地として県内外、外国からも多くの観光客が訪れている。

② 座間味村の強み

- ・ 基幹産業である観光関連サービス業が好調を維持、堅調な入り込み客数の推移

平成 26 年 3 月には本村を含む慶良間諸島の国立公園指定を契機に入域観光客は増加傾向を見せ、平成 27 年は入域観光客数が過去最高（平成 15 年 96,294 人）を上回る 102,591 人と初の 10 万人を突破した。（平成 25 年 79,966 人、平成 26 年 92,107 人、平成 27 年 102,591 人と 3 年間で約 1.3 倍の伸び率）このような入域観光客数の堅調な推移により、本村の基幹産業である観光関連サービス業は好調を維持している。

また、既に指定されている、慶良間諸島海域のラムサール条約登録地についても見直しが行われ登録面積が大幅に拡大される（353ha→8,290ha）ことが昨年（H27 年）5 月末に決定したことにより対外的な関心が高まり、今後の更なる観光客の増加が見込まれる。

- ・ 県都那覇からの良好なアクセス

本村は那覇市から西に 40 キロに位置しており、那覇市内港からフェリーで約 2 時間、高速艇で約 1 時間と良好なアクセス環境下にある。フェリーは 1 日 1 便、高速艇は 1 日 2 便（シーズン時は 3 便）運航しており、このようなアクセス環境の良さから、近年では日帰り観光客が増加しつつある。

- ・ 国立公園指定による知名度向上

日本屈指の多島海景観と高密度に生息する珊瑚礁の海に囲まれた座間味村は、2014 年（平成 26 年）3 月 5 日、隣村の渡嘉敷村とともに「慶良間諸島国立公園」として指定された。豊かな自然環境と海洋資源が高く評価されたことで、メディア等にも多く取り上げられ、国内外からの関心も高まり知名度も向上した。

③ 座間味村の弱み

・人口の減少傾向

座間味村は昭和 45 年（1970 年）に 1,109 人だった人口が昭和 55 年（1980 年）にかけて減少傾向をみせたが、その後増加し平成 7 年（1995 年）には 1,000 人台を保つが、平成 17 年（2005 年）を境に 1,000 人を割り込んでいる。近年は約 900 名の水準を維持してるが、今後も減少傾向の継続が懸念される。

・夏季への過度な入り込み客の集中

過去 3 カ年（H25～H27）の入域観光客データによれば、夏季シーズン（7 月～9 月）に年間入域観光客数の約 47%が集中しており過度な偏りが見られる。中心となる客層も時期により変化し、夏季シーズン（7 月～9 月）は若者、ファミリー層、10 月～11 月（中高年層、外国人）、1 月～6 月（中高年、ファミリー、学生）となっている。

・座間味島以外の 2 島（阿嘉島、慶留間島）の過疎化進展

主要機関の所在地及び人口割合、観光関連業者の多さから、座間味島が村経済及び観光の中心地点となり、他の有人島（阿嘉・慶留間島）の観光開発は遅れがちとなっている。併せて、人口の流出も進んでおり、昭和 45 年（1970 年）時点の約 6 割まで減少している。

④ これまでの取り組み

閑散期の入域観光客数増加に向けて、毎年 11 月の 1 カ月間「座間味島ファン感謝月間」と題し、座間味島ファンのために島民手作りによる「おもてなし」イベントを平成 17 年より開催。商工会は実行委員会として参加協力、月間で 1200 名余りの参加者を迎えています。

⑤ 座間味村の課題

・夏季に集中する観光客・冬季の誘客への対応

当村では宿泊・ダイビング業をはじめとする観光関連産業が基幹産業と位置づけられている。現状ではダイビング等マリンレジャーを目的とする観光客が夏の観光シーズンに集中しており、ピーク時には宿泊施設や飲食店の受入不能や慢性的な人手不足となる事態も発生する一方で、冬季は閑散となることが多くみられる。

当村は平成 26 年に国立公園の指定を受け、今後、知名度、集客力は一層高まるものと期待されており、こうした状況を鑑みると、今後は夏季の海洋性レジャーを目的として来訪する若年層に加え、自然探索や保養、グルメなどを目的とする新規顧客（訪問目的の異なるリピーターを含む）の開拓を図り、通年型観光地としての地位を確立することが地域振興の方向性として適切と思われる。

・観光消費受け皿としての特産品・飲食メニュー不足

一層の地域活性化実現への課題は、年間を通じて誘客を図り基幹産業である観光関連産業の活性化を推進することである。

そのためには、新規標的顧客層の設定と、それらのターゲットに適合する季節感を持つ魅力的な飲食メニュー、記念の品とするみやげ品・特産品等の商品開発を推進し、誘客促進と観光消費拡大を図る必要がある。

こうした取り組みは、顧客視点からも、グルメ探訪やショッピングなど滞在の満足度を高めるものとなり、「おもてなし観光地」としての座間味村の対応すべき重要な課題と考える。

・三島（座間味島、阿嘉島、慶留間島）の連携による魅力創造への取り組み

座間味村は、観光の中心である座間味島から村内フェリーにて連絡される阿嘉島、阿嘉島と橋で結ばれている慶留間島の3つの有人島を持っている。また、慶留間島と橋で結ばれている外地島には滑走路1500メートルの空港が所在している。

現在、観光客の多くは座間味島のみを訪問しており、阿嘉島、慶留間島への訪問客は限られている。これら2島は、その優れた景観とともに天然記念物であるケラマジカ、極めて希少な地層や固有種の植物など豊かな自然を有しており、観光資源は豊富といえる。

阿嘉島、慶留間島を観光資源として一層活用することができれば、多様な楽しみを観光客に提供することができ、また、「島巡り」という移動自体も観光行動の中で重要な訴求ポイントになる。過疎化が進展しつつある阿嘉島、慶留間島にもより多くの観光客に訪問いただけるような仕組みづくりについて検討することが、座間味村の重要な課題のひとつと考える。

・多様なメディアを活用した積極的な情報発信

観光パンフレット作成や都市部観光フェアへの出展、ホームページ作成などにより情報発信活動を継続的に実施しているが、特にマスコミ、SNSなど近年の情報収集手段として重視されるメディアの活用が不十分な状況であり、イベント情報、季節の味や見所など、旬な情報の発信強化が課題のひとつとなっている。

5・顧客ニーズ等の継続的な情報収集

変化する観光客ニーズの把握に基づく観光関連事所の的確かつ迅速な対応が望まれる。

しかし、年間観光入り込み客数が現状では安定的に推移していることもあり、事業所による経営革新意欲は比較的低いものとなっている。

今後の観光ニーズの変化や観光産業を取り巻く環境変化が予想される状況下、観光関連情報および村内事業者の経営実態把握は継続的に実施される必要がある。

(2) 観光政策の動向

わが国では、平成 19 年 1 月に観光立国推進基本法が施行され、同年 6 月には観光立国に向けた総合的かつ計画的な推進を図るため「観光立国推進基本計画」が閣議決定された。平成 20 年 10 月には国土交通省の外局として観光庁が設置され、観光立国に向けた取組みを推進している。また、平成 24 年 7 月に閣議決定された「日本再生戦略」では、更なる成長力強化の取組みとして「観光振興」が位置付けられ、以下に示す重点施策が掲げられている。この中で観光立国に向けて地域が実施できる施策としては、今後成長が見込まれる訪日外国人旅行者の増大に向けたプロモーション活動と受入環境の整備、観光需要を喚起するためのニューツーリズム等による観光の高付加価値化やブランド化等が挙げられる。

日本再生戦略における観光立国に向けた重点施策

訪日外国人旅行者の増大に向けた取組、受入環境水準の向上
①オールジャパン訪日プロモーション体制の構築と実施
②市場別誘致目標の設定
③訪日外国人旅行者の出入国の円滑化
④オープンスカイの推進
⑤首都圏空港や関空の強化
観光需要の喚起
①LCC の参入促進のための環境整備
②国管理空港等の経営改革の推進
③ニューツーリズム（エコツーリズム、グリーンツーリズム、スポーツツーリズム、ヘルスツーリズム、ユニバーサルツーリズム、医療と連携した観光等）の振興
④国際会議等の MICE の誘致・開催推進
⑤評価等を通じた戦略的な観光地域づくりの促進、ブランド化
⑥魅力ある観光地域づくりのための環境整備
⑥ 休暇改革の推進

2. 一層の活用が期待される座間味村の地域資源

① 自然資源

・ビーチ

白砂に縁取られた島々が点在する内海はサンゴ礁が発達し、美しい海中景観でダイバーを魅了してやまない海域。平成 17 年にはラムサール条約に登録され、世界的に貴重なエリアとなっている。夏の満月の夜にサンゴが一斉に産卵する神秘的な光景が見られ、慶良間海域は沖縄本島周辺で造礁する“サンゴのふるさと”と呼ばれている。

海水浴、スノーケル、シーカヤックなどのマリトレジャー、朝日や夕日、星空観察、バーベキュー、なにもせずゆったり過ごすなど、観光客や地元住民が様々な楽しみ方をしている。

・無人島

座間味村は 20 あまりの島からなり、うち 3 島が有人島であり残りは無人島となっている。渡し船等を利用し手軽に渡海できる無人島も数多く、マリトレジャーの拠点として、非日常性を楽しむ場として活用されており、座間味村ならではの独自性の高い地域資源といえる。

・動植物

天然記念物である、ケラマジカ、カラスバト、アカヒゲ、マダラトカゲモドキ等の動物、座間味村の固有種であるケラマツツジなど、豊かな動植物体系を持つ。動植物観察にも優れた地でもある。

・地形

起伏の多い地形であり、海岸線だけでなく、トレッキング、森林浴など「山の観光」も楽しめる。世界的にも珍しいとされる地層を間近で観察できるなど、地形に興味を持つ層に対しても魅力的な資源を持っている。

② 一次産品および特産品

・魚介類

歴史背景を持つカツオをはじめ、新鮮な魚介類が豊富。漁師料理などの伝統料理も伝えられており、グルメ素材としての活用が期待される。

・農産物

当村は平地の少ない地形であり、さとうきび等の大規模農業は行われていない。一方で、少量生産ながら様々な野菜類、根菜類が生産されており、小規模兼業農家が多く無農薬で丁寧に生産されているため、村外からも良質な産品と評価されている。

また、柑橘類、ヤマモモなどの果実が自生しており、これらも有効に活用すべき素材といえる。

③ 歴史資源

・唐船貿易の中継地の島

住民は昔から海洋思想に富み 1350 年察度王が明国と朝貢関係を結んでからは、那覇を出港した進貢船、唐からの冊封船は座間味島の阿護の浦港に風待ちのために立ち寄り、本村からは多くの有能な船乗りを輩出した。番所山（ばんどころやま）の烽火台では、狼煙をあげ唐船が近づいたことを那覇に知らせていた。

・信仰の島

沖縄県南城市の久高島とともに信仰の篤い島。時代とともに失われた祭祀もあるが、集落内の拝所の多さが村民の信仰心を物語る。

現在も旧暦に沿った神行事が島のどこかで毎月行われており、秋の海御願（ウミウガン、海神祭）などは、海洋民族として今なお村民が大切にしている神事。

・鰹漁業創業の島

明治 34 年（1901 年）初代村長松田和三郎が鰹漁業を創設し、沖縄県土に広めた。本村産の鰹節「慶良間節」は良品の代名詞として知られたが、後継者不足により産業としての鰹節生産は途絶えた。しかし、春先からのカツオは今も島の食卓を賑わせている。

④ 観光関連サービス事業所

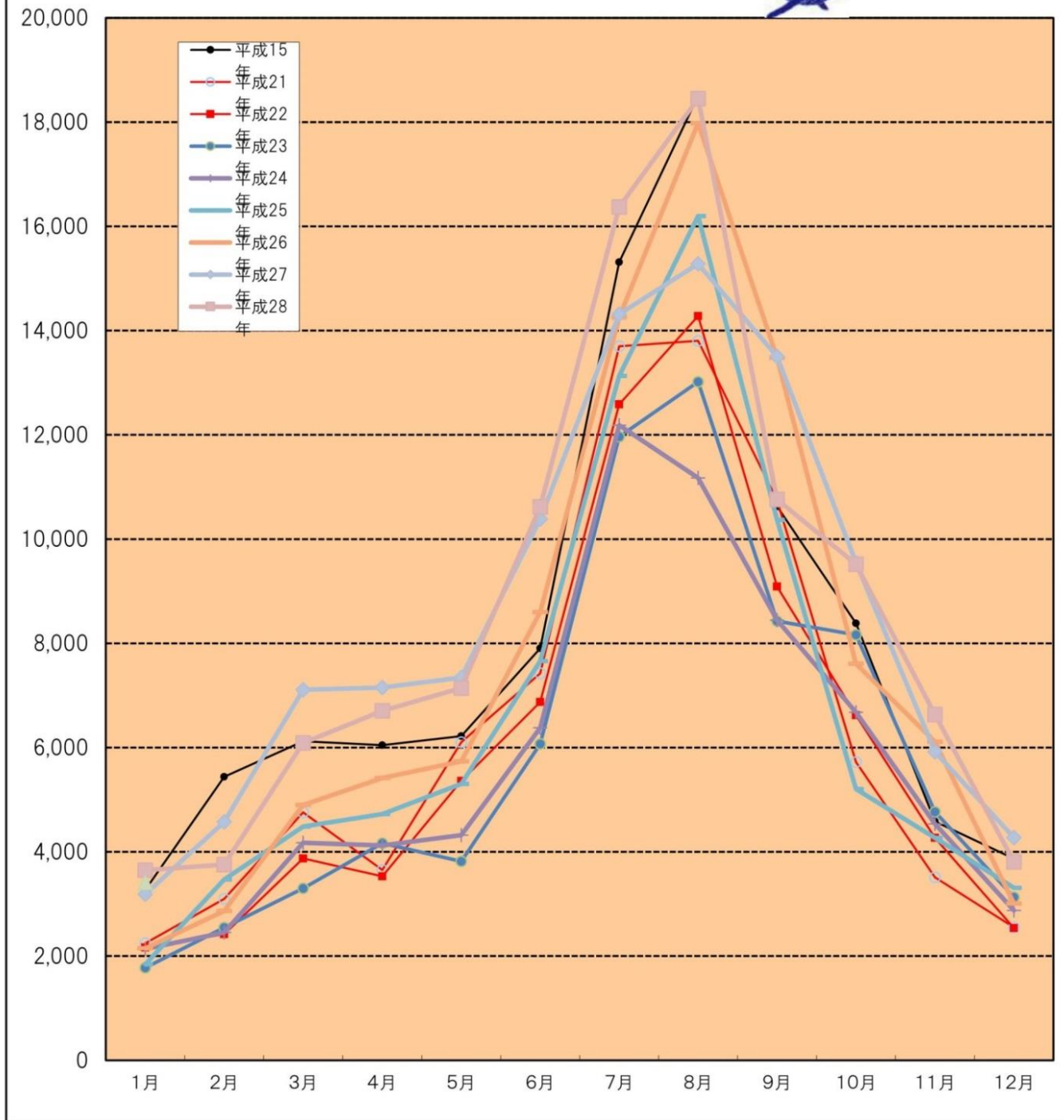
座間味村の就業人口の約 93%が第 3 次産業に従事しており、そのうちの大多数は観光関連サービス業であり、観光関連産業が基幹産業と位置づけられている。

村内には、民宿を中心としてリゾートホテルなど様々な宿泊施設が約 70 軒所在しており収容人員は約 1,700 名。一方で、いわゆる名物料理を提供する飲食店は限定されており、一般的な食堂や弁当店が中心となっている。カフェでは、海や山の自然風景の中でいやしの時間を提供しており、女性客を中心として人気が高い。

座間味港には多目的ホールとあわせ、観光協会事務所、特産品販売所が設置されており、観光地としての受け入れ体制を整備している。

また、現在は緊急時以外には利用されていない 1500m の滑走路を持つ空港が外地島に所在している。離発着ロビーが整備され、1 名の職員が常駐しており、その活用も検討したい。

座間味村入域観光客数



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
平成15年	3,272	5,438	6,120	6,048	6,222	7,903	15,316	18,506	10,629	8,386	4,586	3,868	96,294
平成21年	2,245	3,097	4,760	3,652	6,105	7,424	13,700	13,805	10,746	5,721	3,512	2,551	77,318
平成22年	2,164	2,421	3,874	3,528	5,359	6,875	12,584	14,281	9,089	6,619	4,269	2,536	73,599
平成23年	1,776	2,546	3,301	4,163	3,817	6,069	11,966	13,018	8,428	8,162	4,766	3,131	71,143
平成24年	2,138	2,452	4,176	4,125	4,321	6,382	12,186	11,175	8,447	6,676	4,537	2,874	69,489
平成25年	1,842	3,468	4,487	4,724	5,303	7,660	13,129	16,198	10,368	5,207	4,270	3,310	79,966
平成26年	2,150	2,866	4,897	5,416	5,734	8,602	14,255	17,981	13,478	7,610	6,111	3,007	92,107
平成27年	3,188	4,574	7,110	7,150	7,347	10,382	14,315	15,281	13,501	9,548	5,921	4,274	102,591
平成28年	3,648	3,756	6,090	6,707	7,142	10,619	16,374	18,451	10,760	9,516	6,636	3,806	103,505
平成29年	3,413												3,413

昭和50年度：60,000人 昭和60年度：60,958人 平成7年：77,882人 最高入込客数 平成28年：103,505人

3. 先進事例視察研修

第1回

実施年月日	平成28年12月19日(月)～平成28年12月21日(水)
調査員氏名	宮平安弘、宮里祐司、宮平一明、前田正樹、荻堂盛臣
調査対象先の概要(資料等があれば添付のこと)	
・名称: わしたショップ博多店 ・イルカウォッチング ・天草市商工会 ・住所: 福岡県博多区祇園町4-73 ・熊本県五和町鬼池4733-1 ・熊本県天草市本渡町本渡2547-2	
・面談者または調査対象(ターゲット) 天草市役所(産業政策課)、天草市商工会(会長、事務局長、経営指導員)、 本土商工会議所(経営指導員)、天草宝島観光協会(事務局長)、アマビズ(センター長)	

調査事項と調査の経過概要

12/19(月) 福岡県福岡市

沖縄県内の特産品等物産販売を行っている「わしたショップ博多店」を視察した。

今年8月にオープン。川端商店街内に店舗を構える。店内には沖縄県各地の特産品類が陳列され販売されている。店長が不在であったため店員の西田氏に話を伺う。以前は天神にわしたショップがあったが今年5月に閉店。当店はフランチャイズ契約での出店とのこと。売れ筋商品は麺類や菓子・黒糖類であり、客単価は1,000円～1,200円とのこと。客層は幅広いが沖縄への旅行者が土産物の買い足しで利用することが多いとのこと。現在店舗には約2,000アイテムが揃っている。開店4カ月足らずであるが徐々にリピータもついてきているとのこと。フロア面積は25㎡余りと狭いため酒類は2階に展示しているが店舗奥からの移動となり客導線は悪い。離島地区の土産類も多く揃っているが、残念ながら座間味村の商品は取り扱っていない。店員によればフランチャイズなので、店長判断で取引が可能であるとのことであった。通常のをしたショップとの取引ではロット数や納品期日などの条件面からハードルが高くネックとなっていたが、小ロットでも取り扱いの可能性があるので、座間味村内の土産品取扱いも今後検討して頂ければと伝える。委託手数料など詳細な取引条件までは聞き取れなかったが、販路開拓先として活用の可能性を感じた。



12/20（火）熊本県天草市

・イルカウォッチング（天草市五和町）

五和町沖合の海域には、潮流と起状にとんだ海底によって魚類の宝庫となっており、これをえさにミナミハンドウイルカ約300頭が日本近海では希といわれる根付きのイルカとして通詞島沖合の海域を中心に生息している。この野生のミナミハンドウイルカを見学するツアー「イルカウォッチング」が年間通して行われており、天草地方を代表する観光メニューの一つとなっている。沖合に生息しているのではほぼ100%の遭遇率と言われている。当日は島原近くまで移動しイルカを見ることができた。利用者の満足度は高いと思われるが、海上でのイルカ探索やウォッチングにおいて他の船舶との航行やイルカとの距離などが近すぎるように感じた。五和町ではイルカウォッチング業者が複数存在しているが、協会としてまとまっておらずルール化が整備されていないと思われる。また、乗船するまでの待ち時間や待機場所でのイルカウォッチングに関する資料や説明が殆ど無く見学者の立場として必要だと感じた。（座間味村のホエールウォッチング協会が進んでいる）

昼食先となった天草海鮮蔵では代表取締役の野崎多喜子氏から当地区におけるイルカウォッチングの歴史について教えてもらった。野崎氏は五和町でイルカウォッチングを始めた第一人者であるが、当初は地区内からの指示は得られず苦慮したとのことであった。イルカウォッチングが軌道に乗り始めた頃から地元から参入する事業所が増え始め現在に至るとのこと。



・意見交換会議（天草市商工会にて）

天草市役所、天草宝島観光協会、本渡商工会議所、アマビズ、天草市商工会による合同の意見交換会を実施。天草市は平成18年3月に2市8町が合併、人口8万人余りと熊本県内でも3番目に入る規模の行政区画とのこと。産業も温暖な気候を活かした農業や業業の他、自然景観や南蛮文化やキリシタンの歴史による多くの観光資源を活用した観光産業が基幹産業となっている。観光客は年間440万人余り、うち日帰り客が9割近くを占めるといった特徴がある。そのような現状から天草市では宿泊客の増加に向けての観光振興が課題である。そのような中において市商工会ではこれまで全国展開支援事業を含めて平成21年度から観光振興に向けた取り組みを実施。特に平成25年度には地区内各所からの企画提案を受け各地域の地域振興案の検討に入っているとのこと。合併により地域が広範囲にわたることから地域の特色を活かしつつ面的な活性化策を行う事が求められていることが感じられた。また、2016年（平成28年）4月に発生した熊本地震では直接的な被害も少なく、7月からの「ふっこう割」による後押しもあり、観光客数は前年並みであったとのこと。なお、天草市においては観光客が今後最大500万人を予想しているが、地域内観光関連業者の後継者問題が大きな課題である。

ブランドづくりへの取り組みとして、本渡商工会議所では「天草謹製認定委員会」を立ち上げ市内特産品に対し「天草謹製」の認定を与える事業を実施、現在 22 品が登録されているとのこと。認定に際しては厳しい審査基準があり審査認定は申請の 1 割に満たない。なお、この取り組みにより特産品開発に関わる事業者の意識が高まり、新たな素材を活かした商品開発や独自の勉強会立上げなどの動きに繋がっているとのことであった。

観光協会の取り組みとして「天草ランチガイドブック」を紹介。天草市内のランチ提供飲食店を紹介した冊子であるが、地域食材を活用したメニューが掲載されており充実した内容に仕上がっている。また、季節ごとの食の取り組みにも力を入れており、毎年 3 月から 5 月は「天草生うに三昧」として 3 月 1 日に解禁するムラサキウニを使ったメニューを市内飲食店に展開、統一された食材で各店舗の特色を活かした展開は非常に魅力的であった。他に「井井フェア」と題してネタも井も天草食材を使ったメニュー提供を市内飲食店にて展開する企画も実施。地区内観光振興を担う窓口として、飲食店や宿泊所などとの連携を活かした集客効果の高い仕掛けづくりは非常に参考となった。

その他、一般社団法人天草市起業創業・中小企業支援機構（通称「アマビズ」）は平成 27 年 4 月にオープンした中小企業支援機関。産業支援拠点として専門スタッフが常駐し相談に応じており、主に創業支援や既存事業者への経営支援に取り組んでいる。設置依頼高い支援実績を上げており、天草市産業振興に寄与しているが、同じ地区内には本渡商工会議所及び天草市商工会が併設し、企業支援機関が多くないかとの懸念があったが、実際は商工会・会議所・アマビズは連携をとり地域内事業者への支援を行っているとのことであった。沖縄県にはこのような支援機関は存在しないが、支援を受ける事業者にとっては、複数ある支援機関が連携を取り自社の経営課題解決が円滑に進むのであれば理想的な体制であると感じた。ちなみに、天草市役所（産業政策課）でも一つの地区内に商工会・会議所が併設している状況の中でアマビズが専門的支援機関として存在することで、地区内事業者への支援体制の充実が図られることを狙っているように感じた。

以上、当初予定より大幅に延長し 2 時間にわたる意見交換会となったが、天草市の観光産業振興への取り組みとして、市行政を始め商工会・会議所・観光協会・アマビズといった支援機関が連携を図り展開していることを学ぶことができた。座間味村に比べれば大きな地域ではあるが、観光振興への取り組みとしては本村でも十分に参考となる事例が多々あり今後活かせる内容であった。



今回の視察研修にて主に熊本県天草市の取り組みについて学んだが、総じて天草市は仕掛けづくりが非常に長けている印象を得た。プレスリリースも集客を図る手段として上手に活用しており、顧客目線でのワクワク感や一体感、特別感などを提供側も楽しみながら行っている印象を受けた。特に往復路にて利用した天草エアラインは小さな航空会社でありながらも手作りの機内誌やサンタクロースのコスチュームの方には格安での搭乗割引などの取り組みがなされ、小さいながらも顧客満足を追求する当社の真摯な取り組みに感銘を受けた。観光地として地域にある資源を最大限に活用し、地域内で連携を図り訪れる観光客に喜びと感動を与え楽しんでもらい、また来たい！と思わせる環境とおもてなし、サービス・商品を提供することが大切であることを改めて思い知ることができた。

平成28年度座間味村商工会 小規模事業者地域力活用新事業全国展開支援事業
視察日程表

日付	時間	行 程	備考
12月19日 (月)	10:00 12:30 13:30 15:15 16:00 18:00	クイーンざまみにて泊港へ(11:10着) 那覇空港3階JTAカウンター集合<搭乗手続> 那覇空港発→JTA054便にて福岡空港へ 福岡空港着 地下鉄にて博多駅へ移動 わしたショップ博多店 視察 宿泊先にてチェックイン ※各自にて夕食	ホテルスカイコート博多 福岡市博多区祇園町4-73 電話 092-262-4400 わしたショップ博多店 福岡市博多区上川端町 4-224 川端商店街内 電話 092-409-5580
12月20日 (火)	07:45 09:10 09:45 11:00 12:45 14:15 14:30 16:30 17:00 18:00	朝食 ホテル出発 福岡空港へ出発 福岡空港発→AMX054便にて天草空港へ 天草空港着 レンタカー受付 イルカウォッチング体験 昼食 天草市商工会(本所)到着 意見交換会議 (天草市役所、アマビズ、観光協会、商工会、会議所) 終了 宿泊先へ移動 チェックイン 夕食	(昼食・イルカウォッチング) 天草海鮮蔵 天草市五和町鬼池4733-1 電話 0969-52-7707 (宿泊先) 天草プラザホテル 熊本県天草市栄町4-8 電話 0969-23-5511 (夕食) 居酒屋りょう 天草市港町18-12 電話 0969-22-1230
12月21日 (水)	08:00 09:00 10:10 10:30 11:05 12:45 15:00 16:00	朝食 ホテル出発 天草空港到着 レンタカー返却 天草空港発→AMX201便にて熊本空港へ 熊本空港着 那覇空港行に乗り換え 熊本空港発→ANA1867便にて那覇空港へ 那覇空港着 泊港へ移動 クイーンざまみにて座間味港へ 座間味港着 ～おつかれさまでした～	

<参加者報告>

◆氏名：宮平安弘

12月19日（月）わしたショップ博多店

博多駅近くの川端商店街に立地しており、人々の通行量がかなり多いと見受けられる。狭小な店舗でありながら、売れ筋を選定しかなり効率よく販売しているのではないかと察せられた。フランチャイズ制であるという事も感心した。売上高が気になるのですが・・・。

12月20日（火）天草へ

まず「天草エアライン」の「いるか」をイメージしたデザインも見事だった。スタッフがサンタの帽子をかぶり、気持ちの良い接客対応は心地良く、また乗りたい飛行機だと感動した。サンタの衣装を着て登場すると割引制度があるというのもユニークな発想だと感心した。倒産しそうな企業を見事に立て直した成果がスタッフ全員に浸透しているのが感じられた。

天草海鮮蔵の野崎多喜子氏が「イルカウォッチング」を立ち上げた経緯、熱意には感心した。目の前にある資源の活用、展開は見事。レストラン・土産物販売と複合展開力もすごい。気合を入れて「いるか」の群れのいる場所を探してくれたが流石地元で経験を積んだ漁師の腕は見事だった。通年見られるとの事、入り客数、ウォッチングルールはどうなっているのか気にはなったが・・・。

天草市商工会との意見交換会

熊本県一の広大な面積を有する天草市、農林水産資源が豊富だという事を痛感させられた。アマビズレポートの内容には、感心しっぱなし、合併により多くの支所がある商工会、それぞれの地域の特性を生かした特産品・観光商品開発、商工会議所の認定品「天草謹製」は見事でした。日帰り観光客が圧倒的に多いという現実、滞在客を増やすのは大変だろうなと思いました。



◆氏名：宮里祐司

12月20日（火）

熊本県天草市にて合流、五和町に移動。

天草市の観光名称の一つであるイルカウォッチングを視察。通常は陸地近くにも生息しているようだがこの日は島原半島近くの沖合まで移動してのウォッチングであった。座間味村のホエールウォッ

チングと違い移動しながら見つけるため、遭遇率は高くても今回のようにかなりの沖合まで移動しないと見られないとのことであった。

天草市に移動し、市内各支援団体の方々と意見交換会。

天草市役所始め観光協会、商工会、会議所、アマビスが揃い意見交換会を実施。天草市は2市8町が合併、観光にも力を入れておりブランド化事業や、飲食関連のイベントを観光協会や商工会などが連携して実施している。

橋でつながった離島区であり規模も大きいですが、年間300万余りの観光客が訪れるだけの取り組みを各団体が連携を図り取り組んでいることがわかった。座間味村においても特に閑散期に当たる今後の取り組みとして参考にしていきたい。

◆氏名：前田正樹

12月19日（月）座間味村→福岡まで移動。

16時～わしたショップ博多店にて店舗内の視察し店員の方とお話をさせて頂いた。様々な特産品がカテゴリー別に販売されていましたが、渡嘉敷村のまぐるジャーキーが置いていたので座間味村も県外でPRできる特産品の開発に力を入れる必要があると感じました。

12月20日（火）福岡→天草まで飛行機にて移動。

11時～天草にてイルカウォッチングを体験。相当数のイルカを観察できたが出港してから探索するシステムなので、時間にゆとりが無い場合には参加しにくいのではと感じました。ただ、ランチとのセットプランは飲食店が少ない座間味村ではとても効果的で、海域、陸域など様々なプランを作成すれば閑散期の集客力並びに飲食店の収益アップにも繋がると感じますので、事業者さんと話し合いの機会を設ければと感じました。

15時～天草市商工会にて意見交換会議。

日帰りの観光客数の割合が多く観光客層に違いがあると感じましたが、目的（ダイビング、ホエールウォッチング等）があって訪れるのではなく、訪れることが目的となっているので、座間味村もそのような位置づけ（ブランド化？）に出来れば平準化率も改善するのではと感じました。

◆氏名：宮平一明

天草市視察研修は平成28年12月19日～12月21日、計2泊3日にて行われた。初日12月19日は福岡市に宿泊し、博多駅近くのわしたショップを視察。翌20日には、天草市に移動し、午前はイルカウォッチング、午後は地域の商工会、市役所、観光協会等などと意見交換会を行った。

12月19日（研修初日：福岡市）

福岡市博多駅から歩いて、10分の所にある「わしたショップ博多店」にて視察を行った。店舗の場所は、博多駅からさほど遠くないアーケード式商店街の中にあり、比較的人通りの多い所だった。

近くに有名な寺社などもあるので、その関係もあり人の行き来が多いと思われる。店舗内は、1階特産品コーナーと2階沖縄の地酒と明確に分けられていた。店内をみてまず気づいたのは品数の多さ。単に有名どころの特産品だけではなく、沖縄本島でさえ見かけないような各離島市町村のマニアックな特産品が並んでいたことに驚かされた。

特に菓子・泡盛・塩などの飲食物の種類が多かった。しかし、逆を言えば工芸品等の品数が少なく感じた。やはり、飲食物の方が工芸品よりも重くなくかさばらず運搬できるため必然的に種類が多くなっていったのではないかと思う。しかし、九州一の大都市、福岡市にて常に営業し沖縄の特産品を販売してくれているのはとても喜ばしいことだと感じる。この福岡市を起点にして九州全土への特産品アピールの足掛かりになりうる可能性があると思う。それは同時に沖縄県にて今も昼夜問わず特産品作りに動かしんでいる全事業者への九州全体に向けての情報発信のツールにもなりうる存在だと感じた。

12月20日（研修二日目：天草市）

日本一小さな航空会社天草エアラインにて福岡市から天草市に渡った。天草についてすぐ行ったのがイルカウォッチング。天草と島原の間に位置する島原湾にてウォッチングを行う。湾といえどもその範囲は大きく、その広大な海からイルカを発見し、しっかりとウォッチングさせてくれたウォッチング船の船長並びにガイドには驚かされた。

イルカウォッチング終了後は、今回のウォッチング船を所有している飲食店兼お土産品店にて昼食を食べた。その際に、この飲食店の社長と会談することができた。その内容は、イルカウォッチングの誕生から今まで、果ては天草市の地域での取り組み、そしてそれに伴う裏事情など対外的な社交辞令を取っ払った話が出来たのはとても有意義な時間だった。

午後からは天草市役所、商工会、観光協会、アマビズとの意見交換会を行った。その中で感銘を受けたのはアマビズさんの話だ。天草市商工会、役場、観光協会などの各種団体の垣根を乗り越え、時にはともに融合しながら、これから天草にて事業を起こす人々の為に取り組む姿勢は心に熱いものを感じてしまった。自分たちの村もいろいろな垣根を取っ払い、各団体一丸となって地域の人々に尽くせたらどれだけ素晴らしいのだろうと思う。

最後に、今回の視察研修はどうしても期間が短い為、ゆっくりじっくり聞いてみるのは難しかったと思います。又、僕自身の事前の勉強不足もあるかもしれませんがそれでも、この限られた僅かな時間で自分の古里とは違う景色や環境、地域の取り組み、外部へのアプローチへの仕方など少しでも肌で感じ、垣間見れた事はこの研修に参加した意義が大いにあったと感じております。正に見聞は一見にしかずとはこのことなり。

第2回

実施年月日	平成29年1月23日（月）～平成29年1月25日（水）
調査員氏名	宮平幸進、宮平賢、大坪弘和、加藤朋成、宮平一明、垣花みのり
<p>調査対象先の概要（資料等があれば添付のこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名称：（一社）尾道観光協会 ・住所：広島県尾道市長江一丁目3番3号 ・面談者または調査対象（ターゲット） 尾道観光協会（事業係長） 	
<p>調査事項と調査の経過概要</p> <p><u>1/24（火）広島県尾道市</u></p> <p>「瀬戸内しまなみ海道」を視察。広島県尾道市と愛媛県今治市を全長約60kmで結ぶ架橋ルート。しまなみ海道にある「サイクリングロード」は日本で初めて海峡を横断できる自転車道で「世界七大サイクリングコース」に選定されている。最近では、台湾や香港など外国から多くのサイクリストが訪れるとのこと。しまなみ海道を走っていると、形の異なった7つの架け橋も見られるため、自然風景だけでなく様々な景観を楽しむことができた。</p> <p>またパーキングエリアでは、しまなみ海道の島々で収穫される柑橘類を使ったお土産（プリン・ゼリー・サイダー・調味料・和菓子など）が数多くみられ、その他にも海産物を使ったお土産やご当地グルメが食べられるレストランもあった。柑橘類を使ったお土産品は、座間味でも参考になるような品もあった。しまなみ海道エリアに行くだけで、景観を楽しみながら、各島の多種多様な観光スポットをめぐり、お土産やグルメが堪能できるといった観光客にとっては満足できるエリアだと感じた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <p><u>観光協会ヒアリング（尾道観光協会 見永事業課長より）</u></p> <p>尾道市は、尾道市街地や田園に広がる北部地域を「おのみちエリア」、しまなみ海道沿線を「しまなみエリア」と大きく二つに分けることができるとのこと。この二つもそれぞれ特徴があり、おのみちエリアは海と山に囲まれて狭いエリアに街並みが形成されており、山の斜面に家々が立ち並び、細い階段や路地が特徴。しまなみエリアは、周辺の島々で構成され年間を通して温暖な気候に恵まれている為、柑橘類の栽培が盛んに行われており、柑橘類を使ったお土産品が数多くみられる。また、しまなみ海道はサイクリングやウォーキングの人気コースになっており、それを活かしたイベントも開催しているとのこと。観光客は年間約670万人。最近では、市街地が日本遺産に認定されたことから観光客が増えている。</p>	

また、外国人観光客も増加しており、台湾からの観光客が最も多い。海外向けのプロモーションなど情報発信に力を入れた効果が出ているとのこと。しかし、宿泊施設が少ないこともあり通過する町となっている。

尾道はイベントが多く、特に3月～4月にかけては毎週のようにイベントがあるとのこと。その中でも尾道の坂を自転車で駆け降りるという「レッドブルホーリーライド」というイベントを今年初めて開催し、約3,000人が集まったという。また、大手自転車メーカーとのコラボでサイクリングイベントを行ったり、尾道オリジナルの自転車を作ったりとサイクリングで観光が盛り上がっている感じを受けた。



尾道市街地視察

ロープウェイで千光寺公園へ。尾道市街地から千光寺公園まではロープウェイで3分、また15分おきに運行している。千光寺公園からの景色は素晴らしく、一番尾道らしい場所と言われているのには納得できた。その後は徒歩で下山。懐かしい独特の雰囲気があり、急な階段や入り組んだ路地など、古いお寺や民家、また空き家を再利用したカフェやゲストハウスなど見どころが沢山あり、坂の町尾道を感じることができた。ルートは特に決まらずに自分の好きなルートで街並みを楽しむことができるのも面白いと思った。

その後は、商店街を視察。工房尾道帆布では、帆船の布を使ってトートバックやリュック、ポーチなどを販売。商品の種類も多く生地も丈夫で長持ちする為、女性に人気とのこと。シンプルながらも実用性が高く、カラーバリエーションがあり女性が好みそうな商品が多かった。

次に、お土産品市場「尾道ええもんや」へ。取り扱うお土産は約500種類。尾道の海産物・尾道ラーメン・雑貨・お菓子類など尾道でしか買えないお土産がたくさんあった。やはり多くみられたのは、柑橘類を使ったお菓子が多く数十種類並んでいた。また、尾道らしいプリントがしている手ぬぐいや、ポストカードや便せんなど雑貨も豊富に揃えられていた。座間味のお土産品にも参考になる内容が多かったと思う。また、食に関しては、尾道ラーメン・尾道焼きなど地名のついた料理があり尾道のソウルフードとなっている印象を受けた。その他には、瀬戸内海でとれた新鮮な魚介類（アナゴ・牡蠣など）を提供している店も多く、尾道ならではの食を食べられるのもとても魅力的だと感じた。尾道ラーメンは、店によって味も様々なので食べ比べもおすすめとのこと。

今回の視察で尾道市の観光の取り組みについて色々見ることができた。サイクリングやウォーキングで尾道らしい景色をみれるポイントが沢山あり、景観をうまく使っている印象を受けた。座間味も景色が素晴らしいので、マップ等をうまく使い景観を活用できたらと感じた。また、食に関しては座間味でも各飲食店で座間味の食材を使った季節ごとのメニューを提供する取り組みをしても面白いと感じた。



平成28年度座間味村商工会 小規模事業者地域力活用新事業全国展開支援事業
視察日程表（広島県尾道市）

日付	時間	行程	備考
1月23日 (月)	10:00 14:00 15:35 17:20 18:30	クイーンざまみにて泊港へ（11:10着） 那覇空港3階 ANAカウンター集合<搭乗手続> 那覇空港発→ANA1862便にて広島空港へ 広島空港着 バスにて尾道へ移動 尾道市到着 宿泊先にてチェックイン 夕食	宿泊先 グリーンヒルホテル尾道 尾道市東御所町9-1 Tel 0848-24-0100
1月24日 (火)	08:00 12:00 13:00 17:00 17:00 18:00	朝食 ホテルロビー集合 尾道視察①（しまなみ海道、道の駅等） 昼食 尾道視察②（尾道市観光協会訪問、商店街等） 終了 宿泊先へ移動 夕食	宿泊先 グリーンヒルホテル尾道 尾道市東御所町9-1 Tel 0848-24-0100
1月25日 (水)	09:00 10:00 11:45 13:45 15:00 16:00	朝食 ホテル出発 バスにて広島空港へ移動 広島空港到着 広島空港発→ANA1861便にて那覇空港へ 那覇空港着 泊港へ移動 クイーンざまみにて座間味港へ 座間味港着 ～おつかれさまでした～	

<参加者報告>

◆氏名：宮平幸進

今回の尾道視察旅行は期待以上のものでした。

スケジュール的になか日の24日がメインでしたが、充実した日程でした。

まず、何と言っても尾道グルメ（海鮮類・尾道ラーメン・お好み焼き等々・・・）は最高で非常に堪能しました。

それでは、今回の視察の状況について報告したいと思います。

2泊3日の行程でしたが、往路・復路は移動日であり中日1月24日がメインの活動日でした。

初日からの主な行動状況を確認しておきますと、初日、夕刻チェックイン後、海岸通り沿いの居酒屋「花あかり」で女将さんやスタッフを囲み、交流会の実施、2日目は午前9時からしまなみ海道を走り、向島、因島、生口島、大三島、伯方、大島を巡りました。

午後、尾道観光協会との情報交換の後、千光寺ロープウェイ経由、展望台、寺院や文学の小路等散策、フリータイムを挟んでお好み焼き屋さんで夕食会、そこで店主ご夫妻との懇談と貴重な情報を得られたことは幸いでした。

“尾道の旅”について所感を簡単にまとめて見ました。

観光名所と言われ、知名度の高い尾道エリアですが、イメージと異なる状況を感じる事が多々ありました。

以下、項目ごとに感じた所を伝えたいと思います。

1. しまなみ海道終着地の今治（四国本島）までの吊橋で結ばれた各島々の眺望、ロケーションが素晴らしい事、加えてレモン等の柑橘類、海産物等の特産品が豊富な事、それぞれ特色のある島ながら、かつて（或いは今も？）の基幹産業である造船業が景観と相反するように、存在感のある姿をしっかりととどめている事。（田中角栄、日本列島改造論がしまなみ海道を誘発？）

2. 観光地でありながら、尾道商店街は活気が感じられず、所々シャッターが下りている事や山の中腹の住宅に空き家らしき模様が見て取れる事、ホテル等の宿泊施設が少なく夜の観光を楽しめる場所が少なく、活力が感じられなかった事

3. 千光寺を始め25余の寺院、林芙美子・志賀直哉等、著名な作家の居住跡や足跡に限なく表示されており、有名な映画のロケ地が点在する等、このコンパクトなエリアは本当に魅力的だと思います。

ただ、着地型観光地でない精か毎年相当数の観光客が訪れるにもかかわらず

適在適所にスタッフやガイド案内が、ほとんど居ないのは残念に思いました。

以上のような尾道の実状について飲食店や観光協会との情報交換、地域についての聞き取りが出来た事は大変意義のある事だったと思います。

主観で話すとするれば、「尾道」は知名度高く、イベントや祭り、見所満載の地区であるにもかかわらず、近隣の三原市や今治（道後温泉）の起点駅～終着駅に挟まれたスルーエリアであるという事です。

着地型観光エリアとして、観光客の囲い込みを睨んだ“街おこし”への気概が残念ながら感じられなか

った事はポテンシャルが高い地域だけにもったいないと感じました。

空き店舗が目立つ商店街にIターン・Uターン等の若者を呼び込み、しっかりと着地型の観光地を目指す事は、行政や商工会議所、観光協会等が多少の地域事情はあるにせよ、主導的な役割を果たせば将来ビジョン確立のもとに活性化出来る、潜在能力は高いものがあるように感じます。

そして尾道の有する歴史や文化、著名人の愛した街として、誇りを持って“街おこし”の地域基盤を確立してほしいと思いました。

まとめに・・・、

ひる返って、我が座間味村にも似たような課題もあるように思います。

現況、好調な観光入域の中、尾道の情報発信力の高さ(ex.観光協会)を参考にしながら、まず、オールシーズン“座間味に泊まって、これもあれも楽しみたい!”と言わせる魅力的な島であるために何を創造し、どのように資源を活用するのか、今回の視察のテーマについて考えさせられた二泊三日でした。

◆氏名：宮平 賢

1.アクセス

中国地方の記録的な雪で、広島空港着陸が危ういとの事。「状況が悪ければ福岡空港へ向かうこともある。」の放送と共に、搭乗案内のアナウンスが適格に行われている。旅行客にGO or NOの選択肢を与えつつも明確な意思を伝えている。広島空港から尾道までのアクセスには、いささか不便さを感じた。バスを乗り継ぎ最寄駅まで行くことになったが、観光客対応のステーションターミナル化がなされていない。これは、後で述べるが、受け入れ側の対象とするものが観光客なのか旅行客なのかによるのでは。

座間味になぞらえると、船舶の運航情報や船内放送、そして防災座間味村があるが、先ずはちゃんとした文章にしなければならない。標準語である必要は無く、訛りや特徴はあってもいいと思う。放送の内容以上に重要なことは、タイミングである。何のための放送なのか、誰に何を伝えたい、あるいは伝えなければならないのかを意識すればおのずと答えは出る。

アクセスについては、船舶の運航判断に異を唱えるものではないが、予定に忠実に運航することが使命であるならば、QZ欠航の際FZの運航時刻を変更する(QZの予定時刻に)など、柔軟に考えてもいいのではないだろうか。また、ヘリチャーターを船舶定期便の代替措置とするならば、座間味～阿嘉～空港のアクセス整備は必須である。公共交通機関(鉄軌道・航空路)における代替措置とは、目的地まで輸送することであり追加の費用負担無しは現実的ではないが、アクセスの不便さは解消しなければならない。

2.イメージと実態

私のイメージする尾道は、①レトロな街並み②坂の街③お寺④水路⑤造船⑥橋であった。実態は、事前のイメージと大きな違いが無かった事から広報が明確になされているのだろう。目的地の情報を入手する際、自らの意思で行う場合はWebを使うがそれ以前にテレビの旅番組や雑誌等のメディアから日常的に送られる情報がある。当地においては、映画や文学での扱いが特出しており、それらによって創り込まれたイメージをメディアやWebで追い打ちをかけている。その意味では図らずも文学や映画が戦略的な役割を果たしているといえる。

座間味のイメージは「海・島・サンゴ礁・等々」、私たちが思うものとかげ離れていないだろうが、はたしてイメージに基づく期待感に込めているだろうか。自然環境に頼らざるを得ない以上、その自然環境や景観の保全（保護と活用）こそ唯一無二の策だが、利便性や経済活動との共生は永遠のテーマである。

3. 観光施設

【ホテル】

当ホテルの醸し出すレトロ感や水路に面したロケーションは、尾道イメージの中にじっくり納まっている。また、街中に在る木造旅館や坂の上の空き家を活用した宿、サイクリング客専用のホテルなども同様に、街のイメージに沿った宿泊施設が目についた。住民情報によると、尾道は通過型観光地になっており、宿泊客は広島やしまなみ海道を渡り松山道後温泉まで足を延ばすようだ。つまりは、尾道イメージに沿った宿泊施設だけが生き残ったのだろうか。居心地よく過ごす都市空間として魅力的な尾道。宿泊施設の増設余地は大いにあると思われるが、尾道イメージこそコンセプトだろう。

座間味村の宿泊施設については、バリエーションも多種多様であり顧客評価もそれなりに高位に在る。そもそも村民産業としての観光業であり民泊から民宿、そして座間味型宿泊施設へと変貌を遂げる中で家族経営の小規模施設が基本である。小規模であるがゆえに宿泊客にとって居心地の良い空間を施設内に求めるのは無理がある。街づくりの中で、ゆっくりと時間を過ごす居場所づくりを考えたい。

【飲食店】

今回は尾道イメージの2Top、尾道ラーメンとお好み焼、そして居酒屋2件で牡蠣等の海鮮料理をいただいた。これこそ、日本国中の人々がイメージする尾道の食だろう。期待どおりに美味ではあったが、店舗数の少なさや早い閉店時間によって選択肢が狭まれる等、宿泊施設の部屋数と併せて通過型観光地に甘んじている現状を如実に表している。

近年、特に座間味区においては、飲食店の開業ラッシュである。その影響もあって宿泊施設の運営形態が一泊二食付き（朝食+夕食）から一泊朝食付きに変化してきた。飲食店の水準は、宿での食事に比べても一定の評価があるが、シーズン等による極端なON=OFFで、安定した経営状況とはいえないのでは。ON期には、「夕食難民」と言われるほど混雑し、OFF期には不定休やスタッフ不在等、サービスは低下する。旅行者にとっては、時間の制約がなくメニューを選ぶことができることから、飲食店開業ラッシュは益々拍車がかかるのだろう。今回の旅行で特に印象的だったのは、景色や観光施設の素晴らしさ以上に地元の人とのコミュニケーションであった。宿における外食スタイルの増加は、宿やアクティビティースタッフ以外に、飲食店スタッフとの新たなコミュニケーションを生み出すことにもなる。

【観光名所】

事前情報では、千光寺をはじめとする神社仏閣。坂の街と細い路地。水路や造船所などの産業遺産。レトロな街。しまなみ海道の起点。に、先述の食あたり。本書における主題となってきた受け入れ対応における『観光客=旅行者』が益々明確になってくる。尾道は明らかに旅行者が旅行目的で訪れる場所である。客に迎合せず土地に息づく、当たり前前の暮らしこそ旅行者にとっての魅力となっている。となれば、旅行者を住民の一人としての消費誘導が重要になるのだろう。

自然環境こそ観光資源である本村では、先に述べた自然環境の保全（保護・活用）を意識したゾーニング

が重要だと思う。積極的に公開する場所はさらなる整備を図りバリアフリー化等も推進すべきであり、保護しなければならないエリアや拝所等の守らなければならない場所での安易な商行為は避けるべきだ。

【街づくり】

草地や空き屋敷などの廃墟の荒れた場所がほとんど目につかない。また、石文化によるものなのか、石畳みを含め土の露出した道路は皆無だ。駅前・商店街・小公園に尾道出身者や当地にゆかりのある作家など著名人の手形からは、街の風景の中に人が生きた息遣いのようなものを感じた。

本村のイメージから、白砂の道を残し舗装は極力避けるべきだと思う。また、公衆トイレの整備は危急の問題だ。しまなみ海道沿いの公衆トイレのみならず、商店街の公衆トイレにおいてもシャワートイレが整備されており、紙の補充や清掃管理が徹底されていた。座間味島を例に、夏シーズンの宿チェックアウト後のゲストや日帰りのゲスト合わせて 500名 (QZ2・3便+FZ) の排泄需要を港ターミナルと、コミュニティーセンターなどで賄っていることになる。夕食難民の次にトイレ難民と言われかねない。

【港】

町の前面のすべてが港の印象。数か所の船着場から様々に船が入出港を繰り返す。向島に足を延ばしたが、船着き場まで遠いという印象がない。

定期船バースは分かりやすく休憩所も備わっているが、ダイビングボート発着はそれぞれのショップにより使用桟橋は異なる。船舶の大型化や増加傾向にあることや外来船舶の港湾使用頻度の高まり等、港湾使用のあり方を整理一考する必要があるのでは。

【島渡し】

旅の楽しみの一つに、「地域の暮らしぶりを見る」がある。それを感じることでできる機会に、朝夕の通学通勤の風景がある。とりわけ中高生のおしゃべりや所持品・服装などは、心の中がホッと温かさがある。向島までの船中、自転車にまたがったままの高校生や野菜をかごに持つご婦人の姿、『乗船料をいつ支払うのか?いくらなのか?聞かれもしないのに、沖縄のさらに小さな500名ほどの島から来ました。』等、チョイ会話が楽しい。

ここでは、「みつしま」について書くが、QZ や FZ も村内航路として利用されている。QZ や FZ が欠航する際には、当該運航時刻に「みつしま」での代替便を運航しなければならないのでは。

以上、今回の旅行で感じたことを座間味と対比しつつ整理した。総じて言えることは、観光業の対象が何らかの目的(アクティビティー等)を持つ観光客なのか、いわゆるパッケージ観光客なのか、街・時間を過ごす旅人なのかによって事業スタイルやその地域の姿が違う事である。

座間味村における来村目的は、唯一無二の自然環境・景観であり、保全(保護・活用)のあり方とその扱い方が生命線である。そして、我々事業者や住民が地域づくりへ主体的に参画する事、民間目線を持ち歩

調の合った行政との協働する地域づくりこそ重要である。

区長として、コミュニティーづくりの立場から言うと、移住者/高齢者/観光事業者/等々、多種多様な住民の構成の中で、人と人を繋ぐコミュニケーションづくりが私の役どころか。

さて、先の総括で述べた『我々事業者や住民が地域づくりへ主体的に参画する事』の手始めに、お手軽な事業として下記取り組みを提案したい。

①下に張ったペナント？フラッグを協力店等に掲げ、デザインに記されたサービスをビジターに対し無償？有償？提供する。

例) トイレ、以外に何かあったかな？

②イメージと実態に関することです。色彩鮮やかな花づくりで身近な庭や周辺の小道を彩りましょう。



◆氏名：大坪弘和

1/23 (月)

- ・ 17:20 広島空港 バスと JR で尾道駅 チェックイン
- ・ 夜 居酒屋へ オーナーから聞き取り
しまなみ街道の一番のお勧めは景色
寺院もお勧め

1/24 (火)

- ・ 午前中 しまなみ海道へ (向島、因島、生口島、大三島、伯方島、大島)
向島 (尾道市) : 人口多い、高校もあり、以前は日立造船所で賑わう、西側は造船業がさびれた事から後に尾道市に合併。
因島 (尾道市) : 人口少ない、
生口島 (尾道市) : 人口少ない
大三島 (尾道市) : 道の駅「多々羅しまなみ公園」、かんきつ類豊富、かんきつ類を使った土産も豊富 (プリン、ゼリー、アイス、和菓子、洋菓子など)、マハタ料理押し。
伯方島 (今治市) : 大島に渡る間に村上水軍の能島城跡がある。潮流は早い (最大 10 ノット)
大島 (今治市) : 亀老山展望公園 (標高 308m) からの景色は絶品。ほぼ 360 度見渡せる。花崗岩の産地になっている。用水路や家の土台などふんだんに思い切りこれでもかというほど使っている。上等な家が時々見られる。

・昼食 尾道ラーメン「朱華園」

20-30分ほど並んだ後入店。行列に慣れているようで、接客担当も調理担当も慌てることなく淡々とオーダーをこなしていた。

・午後 (一社) 尾道観光協会でヒアリング 対応: 事業課長見永洋一氏

人口は造船業の衰えと共に減少、市町村合併により増加。

商店街は閉店が増加。

山の中腹に家が多いが徒歩(場所によりバイク)でしか行けない所が多い。高齢化に伴い空き家が多い。解体するにも車が使えないので人件費が莫大となるため。

寺院が25ほどある。昔よりは減った。

瀬戸内海には700以上の島がある。(約3000島 By: Wiki 島の外周0.1km以上は727島 By: 海保)

3月から毎週のようにイベントがある。

年配の方がボランティアガイドをしている。5名ほど(だったかな?)

サイクリングが盛ん。オリジナルの自転車も作った。

観光客は春から秋が多い。宿泊は少ない。

日本遺産(文化庁)に認定されている。2年連続。1年更新。

・ロープウェイで千光寺公園展望台へ。その後徒歩で下山。途中5ヶ所ほどの寺を見る。

文学の小道 志賀直哉「暗夜行路」など多数の文学の碑がある。

夜 広島焼き屋 オーナーから聞き取り

地代が1/10ほどに減ったため貸したり売ったりする地主が少ない。

尾道ラーメンは隣町のラーメン屋が広めた。

台湾の大手自転車メーカーとコラボしてしまなみ海道を通行止めにして大会を開催、参加料はかなり高い。

野鳥: カモメの仲間5~10、ウの仲間1、ハクセキレイ2、ジョウビタキ2、スズメ5、カラスの仲間2~5、ヒヨドリ(声のみ)、スズメサイズの小鳥約10←座間味に比べると少ない(三原市から空港までの車中からは川でキンクロハジロなどの鴨類などまあまあの種と数)

蝶: 何も見られず。(寒さが原因か?)

後日調べ: 2万年前日本は中国大陸と陸続きで海水面は現在よりも100m以上低く、1万年前四国と本州はほぼ陸続き。瀬戸内海の島々はその後海水面の上昇に伴い陸地と離れる。

まとめ

サイクリングが盛んで客もこの時期以外は多いようで、レンタサイクル屋があちこちで見られるが座間味村では起伏が激しく厳しいだろう。秋-春なら熱中症も気にならないので徒歩で回るのは可能。その際「絶景ポイントマップ」などがあると良いと思う。しまなみ海道からの景色も良かったが座間味も素晴らしい。個人で回るもよし、ガイド付きで回るもよし。

尾道焼き=砂肝入りの広島焼き、尾道ラーメンなど地名の付いた料理があり、ラーメンはインスタント麺の効果があり全国区となり、全国でもかなりの確率で「おのみち」と発音すると思われる。座間味はまだ

まだ全国区の地名ではないため広めるには名物料理を何店舗かで提供しマスコミを使って広めることは出来そうだが、秋から春に掛けての集客を図るにはその季節の名物料理が良いはず。1～4月頃は葉野菜、根野菜などが豊富で大根などは収穫しきれず花を咲かせてしまっている家も多いように思うので手に入りやすい。また海の幸を期待している観光客は多いはずなので、うまくコラボし「座間味〇〇」を多くの店舗で提供すれば、マスコミも取り上げやすいはず。秋から春の間しか提供しない。

◆氏名：加藤朋成

広島県尾道市への視察研修の感想

広島県尾道市への視察研修の感想、書いてみたいと思います。

この度は、貴重な視察研修に参加させて頂き、誠にありがとうございました。僕は広島県出身者で尾道は何度も足を運んだ事の有る大好きな町でも有ったりします。そんな大好きな町を「商工会」的な、「商売」的な、「町おこし」的な目線でみた場合どんな風に見えるのか、とても興味が有りました。結果、いつもとは違う視点で、大好きな尾道と云う町を視察出来た様な気が致します。

旅行の行く先々のお店等で出逢った人々から聴いたお話し、尾道観光協会の方から聞いたお話、本当に面白かったです。座間味島には鰹漁の時代から観光業の現在の時代のシフトが有った様に、尾道には、造船業と云う怪物級産業の発展、そして衰退、それからの模索、そして現在の尾道をスタートとする「しまなみ海道」が「世界の七大サイクリングコース」に選定され、盛り上がるまで至った変化の過程が興味深い感じでした。時代は動いていて、時代の変化に付いて行こうと頑張っているのは座間味の変化の感じと何処か似ている感じがしてとても興味深かったです。そしてその巨大な変化は座間味島も尾道も今現在も当然続いています…。

尾道観光案内所の見永事業係長に聴いたお話で印象的だった事は

- ・人口…143,490人（平成26年12月31現在）
- ・尾道は昔造船の町として繁栄を極めた。（40年前程まで）
- ・歓楽街の「新開（しんがい）は今現在はお店は100件程、以前は600件あったと言う。
- ・尾道には人が宿泊しない、ホテル等、宿泊施設が少ない。通過する町。
- ・尾道をスタートとするしまなみ海道が「世界七大サイクリングコース」に選定されたとの事。サイクリングで盛り上げるような施設等が多々見受けられた。
- ・毎週位で、イベントが有る。イベントが多い。
- ・今この辺りでホットな場所は「大久野島（おおくのじま）」。小学校が離れた兎七羽が大繁殖して、今現在700羽程に。その模様がSNSでネットに拡散され、ウサギを見に来た外国人を中心に10万人の観光客の来島が有るとの事。（今現在の座間味島と同等）ちなみにこの島の住人は今現在26名との事。戦時中は毒ガスの製造工場が有った。尾道と呉の間にある「竹原市」の南に浮かぶ小さな島。港から定期航路船で15分程。
- ・瀬戸内海には727の島が有る。

尾道は造船業の他に、漁業、しまなみ海道を中心に収穫されるレモン等の「柑橘類」の栽培が盛ん、レモンに至っては日本一位の収穫を誇るみたいです。そんな「海の幸」「柑橘類」を使ったお土産が、行く先々で見受けられました。尾道で販売されてるお土産の内容は座間味島でも参考になる内容が多々有ったと思います。

尾道の横に「タコ」で有名な三原と云う町が有るのですが、タコを使って様々な商品、お土産、食品が作られています。座間味島でタコを使った商品開発も面白いかもしれません。（沖縄であまりタコを使ったお土産を聞かない気がするから）

サイクリングを使った町おこしが上手くいってる感じ、興味深かったです。座間味島もノルディックウォーキング、ウォーキング、ランニング等を上手く企画出来れば、何か盛り上がり、作る事が出来るのかもしれない。

何処の地域もそうなのかもしれませんが、座間味島も尾道も、時代の変化に完全に対応しきれてないまま季節が巡っている感じが有ります。何か対策を立てても、その対策が完了する頃には、また新たな時代の変化が訪れて来ていて、その事の繰り返し… だから、面白いのかもしれない。

尾道に暮らす人とのお話は本当に面白くて、経済の浮き沈みがあった事が感じられて興味深かったです。時代は上がったり下がったりする。

個人的には尾道の「空き家再生プロジェクト」にも興味有ったのですが、町の人の意見では、試行錯誤の中に有る印象を受けました。でも中心に居る女性には情熱有るみたいで、今後の展開に期待です。

今回、座間味島の皆様と視察旅行した訳ですが、島の皆様、当然と云えば当然なのですが、島や船、造船、海、海流… みたいな座間味島にも存在している景色に対する好奇心がハンパ無い感じを受けました。一方、坂の町の景色も尾道の売りなのですがその辺りはほとんど関心が無い感じも面白かったです。他の方もおっしゃられていたのですが、瀬戸内海、本当に面白くて、島の若者に、座間味島、ケラマ諸島を比較し客観的に見るように出来る視点を持つ為の良きモデル地地域だと思います。早いうちに視察する機会を設けた方が、座間味島のより良い未来の発展に生かす事が出来る様な気がします。

以上、ざっとであります。尾道視察研修の感想でした。

この度は本当に素敵な機会を与えて下さいまして本当に有難うございました。

2017年2月2日

島のアトリエ *KIRARI* (キラリ)

加藤朋成

◆氏名：宮平一明

平成 29 年 1 月 23 日～25 日、座間味村商工会にて広島県尾道市への視察研修を行いました。今回、自分自身初めての瀬戸内でしたので大変楽しみにしていました。

1 月 23 日。那覇空港を飛び立ち、瀬戸内に近づくにつれ鮮明に浮かび上がってくる瀬戸内海の島々の雄大な景色を一目見たとき、何も言葉が出ませんでした。

ただ、一言言えたのは「なめていた・・・」

そう。瀬戸内海というエリア、いや場所を侮っていました。

僕自身が住み商売をしている慶良間諸島よりも素晴らしい景色はない、とそう思い驕り侮っていました。「なめていた・・・」瀬戸内を一目見てそう言えた事だけでも今回、視察に参加した意味が多いにあったのではないかと思います。

到着した日は夕方だった為、翌日からの尾道視察という事になりました。

翌日、「しまなみ海道」へ。尾道から今治まで六つの島々をつなぐ橋を渡りながらのコースでした。六つの島々を橋で渡りながら「しまなみ海道」を走り感ずることは各島々に島全体が石切場のような島、ゆず栽培に特化した島、瀬戸内の水軍を紹介する島など、各々の島が個性があり特色がありました。でも、すべての島において共通していることがありました。それは、各島々に島の魅力を伝える施設や建物が存在したことです。ただ、「しまなみ海道」を走って終わるのではなく、その島の要所にそれらがあり、瀬戸内の景色を見て楽しむ以外の付加価値を与えてくれました。

午前中で「しまなみ海道」の旅を終え、午後からは観光協会そして尾道の散策となりました。しかし、その前に腹ごしらえという事で全国的に有名な尾道ラーメンを食しに……。視察は見ることも大切ですが、味わうことも大切です。言うなれば、人間すべての感覚を使って視察研修、いや視察学習するという事でしょうか。ま、単純にその地域の旨い物を食べたかっただけです……

昼食を食べ終わると、早速尾道観光協会へ足を運びました。観光協会の方からたくさんの情報を教えて頂きました。「しまなみ海道」が世界の五大サイクリングコースに指定されている事、毎月ごとに何らかのイベントがある事、尾道にUターンで戻ってくる若者が少なく、風情ある昔ながらの日本家屋が廃墟と化している事など丁寧に説明して頂きました。改めて、お礼を言いたくなりました。

観光協会を訪問し終わると、協会の方のご好意により協会が運営する尾道が一望できる展望台へのロープウェイのチケットを頂き展望台へ向かいました。展望台に着きやはり出た言葉は「なめていた・・・瀬戸内なめていた。」飛行機で初めて見た景色と一寸も変わらない風景がそこには広がっていました。本当に圧巻でした。どれだけ自分が見てきた物の数が少ないかを感じえない思いがしました。展望台の絶景を見終えた後は、ロープウェイで町に降りるのではなく徒歩にて降りて行きました。降りるコースは由緒あるお寺や映画の舞台にもなった美しい日本家屋の街を通り、市街地へと戻って行きました。その後は、しばし自由行動となり僕は尾道市の水道を挟んで真向かいにある向島に渡船に乗って散策に行きました。散策と言っても向島に用があるのではなく向島に行く渡船に興味がありました。どういう風な船の形で、どういう時間帯で運行しているのかなど知りたいが為、向島へ渡りました。たぶん、同じ渡船が運行している市町村出身者ならではの興味の示し方ではないかなと思います。

さて、自由行動も終わり楽しみな夕食の時間になると参加者皆で尾道でも老舗のお好み焼屋さんに行きました。初めて食べる本場広島のお好み焼き、とても期待して伺いました。その期待は、もろくも

打ち破られました。もちろん、良い意味です！

この道 30 年のご夫婦が作るお好み焼きはボリュームで中がふっくら具が入り絶品でした。又、目の前で焼いてくれるので、口で楽しんで目でも楽しんでと至れり尽くせりでした。食事を終えてからは、ご夫婦との会話。古くから尾道に住み生活し、商売して来た方の話はとても勉強になり、又学ぶことも多かったです。こういう風に地域の現場の生の声を聞く事は大切だと感じました。

翌日は、視察等もなく一路わが島へ！という事で座間味までの帰路につきました。

最後に、この視察研修は期待を裏切ることだらけでした。なぜなら僕自身が頭の中で想定していたことをことごとく覆すものだったからです。瀬戸内の島々の風景然り、美味なる海産物然り、風情ある街並み然り、すべてが想像を裏切る出来事でした。もちろん、想像を裏切るだけではなくたくさんの事も学ばせてもらいました。学ぶと同時に僕自身の里：座間味村に足りない所も気づかされた気がします。少し話は変わりますが、視察に行っただけそれを眺めるのと、観察して見るのとでは雲泥の差があると思います。後者の方がより深く思索し、感ずることが出来るのではないかと僕は思います。僕自身、その後者の目線で今回の視察にのぞみ、想定を裏切る経験が味わえたことは自分自身の糧にもなりましたし、又、自分自身の糧だけにこの経験を終わらせるのではなく、自身の住む地域に対してこの貴重な経験を利用し少しでも還元していかなくてはならないと思いました。

改めて一言

瀬戸内

「なめてました。」

<尾道研修スナップ写真>

